11月資料展示：

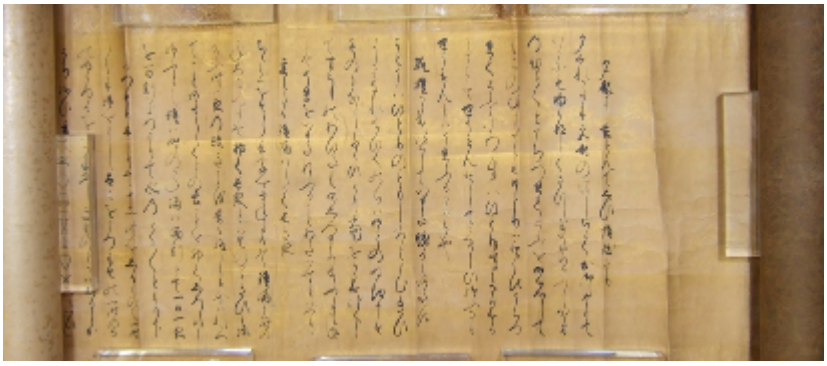
『長恨歌絵巻』／作者不詳　年代不詳　１巻　※狩野松栄筆との鑑定書付

本学の日本文学専修では、創設以来、活字以前の写本や木版印刷本など、原典の一次資料の収集につとめてきました。こうした近世以前の資料については、特に近年、文学と絵画（テキストとイメージ）との相関を問い直す研究が着目されています。なかでも物語系の絵巻は日本で独自に発達した資料で、古書店などでも容易に入手しにくい貴重な資料です。昨年度文部科学省の研究設備補助金を得て購入したこの度の『長恨歌絵巻』は、従来全くその存在を知られていなかったオリジナルな資料であり、文芸と絵画の分野のみならず、白楽天の長恨歌受容の展開をうかがえる、日本と中国の比較文化研究など多方面の可能性を持つ資料です。

（文学部教授　小峯和明）

※この絵巻は、道士が玄宗を訪れ、天界の楊貴妃を探し当てる部分のストーリーのみが描かれています。他の巻も存在したはずですが、失われたか別の場所に所蔵されているものと思われます。

絵巻冒頭部分



挿絵①　楊貴妃を失って嘆く帝

挿絵②玄宗から貴妃の行方の捜索を命じられる道士

挿絵③「玉妃太真院」を探し当てる

挿絵④道士は院内に招き入れられる

挿絵⑤玉妃（楊貴妃）との対面

「長恨歌」のあらすじ

＜開元の治＞

開元年間（713-741）、玄宗皇帝によって国内に善政が敷かれ天下太平であったが、在位の半ばを過ぎると玄宗は政務に倦み疲れ、音楽と美女を楽しむようになった。

＜楊貴妃＞

玄宗が華清宮（かせいきゅう）に行幸した際に腹心の宦官に美女を探させたところ、皇太子である寿王の妃で楊氏の娘、玉環（ぎょくかん）を見出し、華清宮に召し出した。その美しさは眩いばかりで、玄宗は楊貴妃への愛に益々溺れていった。

＜安禄山の乱＞

楊貴妃の叔父・兄弟たちはみな高官につき、楊家の富は王室にも等しくなり、農民は困窮を極めた。そこで安禄山は、楊氏討伐のために挙兵し、玄宗は都を南に逃れた。途中、側近の侍従や上官は玄宗を諌め、天下の怒りを鎮めるために楊貴妃と宰相の従兄は死刑に処せられた。

翌年、大乱は治まり玄宗は帝位を譲り都へ戻った。しかし玄宗の時代は過ぎ去り、玄宗は一心に楊貴妃を思い続け、その悲しみは尽きることがなかった。

＜道士の訪問＞

折しも、蜀の国から神術を使う道士が訪れ、玄宗の切なる思いを知って、楊貴妃の魂を招き寄せようとした。道士は四方の天地をあまねく捜し求めて、東方の果てにひと際高い仙山を見つけた。その山の上に多くの高殿があり、東に向って開かれた門には、「玉妃太真院」と記されていた。童女に招き入れられると玉妃（楊貴妃）が現れ、玄宗の安否を問い、彼女が亡くなった以降の出来事を尋ねた。玉妃は悲しげな様子で玄宗の形見の品を半分に割いて道士に渡すのだった。道士は、さらに玄宗への証拠とするために、二人の間で他人が聞き及んでいないことを教えてほしい、と頼んだ。玉妃は、天宝十年の七夕の晩に二人で夜空を仰ぎ「天界にあっては比翼の鳥（雌雄一体の鳥）、地上にあっては連理の枝（木目が連なった二本の木）になろう」と誓ったことを道士に話し、「必ずや再び逢って昔日のようになるでしょう」と語った。道士は帰ってこのことを報告し、玄宗の心は驚き悲しみ、日々衰弱していきその夏四月（うづき）安らかに崩御した。

（『狩野山雪画　長恨歌画巻』勉誠出版　2006 より引用・抜粋）

白楽天（白居易）とは？

唐代の代表的詩人の一人(772-846)。山西省の人。字は楽天で、白楽天と呼ばれることも多い。号は香山居士。28 歳で進士（科挙の一科目、その合格者）となり、その頃『長恨歌』を作った。次いで社会の暗黒面を批判し、理想主義に立った『新楽府』（しんがくふ）を作った。長女や母の死に遭って儒教的倫理観に疑いを持ち、仏教に傾斜し、江州に左遷された後、草庵を結んで隠棲。琵琶の音に合う詩として『琵琶行』（びわこう）を作る。のち中央に召還されたが、自ら杭州の刺使を望み、明媚な風光の中で越州の刺使の元しんと詩を贈答した。晩年は洛陽に居を定め、『狂言綺語』の尽きざる身を嘆きつつ死んだ。

その詩は、平明な諷喩詩や非定型の『新楽府』にみられるように、その文学の変容に照応した感動的詩型をもつ。『長恨歌』『琵琶行』などは、朝鮮・日本への影響も大きく、ことにその詩文集『白氏文集』（はくしぶんしゅう）は平安期の文学に多大な影響を与えた。

（『平凡社大百科事典』より）